

外国学生用日本語教科書 『分野別用語集』の語彙

野村雅昭・山下喜代

1. 『分野別用語集』の目的と性格

早稲田大学日本語研究教育センターでは、1996年3月に『外国学生用日本語教科書 分野別用語集』(以下では『用語集』と略称)を刊行した。この『用語集』は、中級以上の日本語学習者の語彙力・表現力の伸長を目的として編集されたものである。話題(トピック)によって分類された30の分野(課)別に、それぞれの話題と結びつく見出し語が、小トピックごとにグループとして掲げられ、必要な語には短文による用例が付されている。また、トピックによっては図版を掲げ、理解の助けとしている。

この種の教材としては、初級学習者を対象としたものが幾つか出版されている。その中には、図版を中心としたものも少なくない。しかし、中級および上級以上の学習者を対象にしたものは、そう多くはない。その理由は幾つか考えられるが、主なものとしては、このレベルの学習者が必要とする語彙は、少なくとも5千語を超えることが挙げられる。また、上級レベルに進むにつれて、学習者それぞれの学習目的が絞られてくるため、それぞれの必要とする語彙は多様化する。それらのうち、共通度の高い語彙を選ぶことは困難な作業である。しかも、それを一冊の教科書として編むことには、教授上からも、出版・印刷上からも難しい問題が存在する。

本センターでは、そのような問題意識に基づき、種々の観点から検討を行い、いわゆるテキストではなく、ハンドブック的な教科書を作成するこ

とにした。すなわち、教室で指導者の助言のもとに必要な単語を探したり、それと類義の単語の存在にも気づかせたりすることを意図している。それも、単なる語彙リストではなく、限られた紙幅の中で、学習者に何らかの情報を与えることが必要である。また、学習者が個人で学習するときには机辺に置き、参照できることを考慮した。

そのような目的にかなう教科書を編集するため、本センターに設けられた「中級教材研究会」の語句・漢字部会では、データの収集を行うとともに、数年間の検討を経て、1994年3月に、まず『用語集』の「試用版」を作成した。そして、実際に教室で使用した経験に基づき、さらに検討を加え、修正を施し、一昨年に「本版」を刊行した。刊行後も収録した語彙の分析を続け、その作業は、現在「語彙データベース研究会」に引き継がれている。

本稿は、このような性格をもつ『用語集』に収録された語彙について分析した結果を報告することを目的とする。報告の内容は、語彙論的な分析と日本語教育の観点からの考察が中心となる。

試用版の企画・執筆は、専任研究員の鈴木義昭、中村明、野村雅昭、細川英雄、森田良行、助手の木村義之(現十文字女子短大専任講師)、山下喜代(現青山学院大専任講師)が担当した。本版の加筆・編集・刊行は、野村と山下が当たり、助手の小出美河子、田中妙子が作業を助けた。本稿は野村と山下が執筆し、データ分析の基礎資料の作成には、語彙データベース研究会の小出と田中が協力した。

2. 語彙量の概観と用語の定義

以下で分析の対象とする語彙量は、『用語集』の本文で「見出し語」として提出された語および索引(見出し語索引/ことわざ・慣用句索引)に掲げた語に関する集計結果である。見出し語とは、編者が中・上級の学習用語として選び、意図的に提出したものである。したがって、見出し語を中心とする語彙量の分析は、いわゆる計量語彙論的なそれではない。例え

ば、「これ」「その」「する(為る)」「決して」のような基本的な語は、例文の中にはしばしば出現するが、見出し語としては提出せず、索引には採らなかつたので、対象からは除かれる。ただし、「かれ(彼)」「そろ(揃う)」「突然」のような語は、見出し語としては提出していないが、索引には掲げてある。これらの語は、そのような区別をして、分析の対象とすることがある。

見出し語の中には、2つ以上の分野(課)で見出し語として出現するものがある。例えば、「魚屋」は、〈1. 食物〉と〈12. 職業・仕事〉の2課で見出し語となっている。このような場合、索引では1か所に示されているが、それぞれの課では各1回出現したものとする。単に、見出し語というときは、前者の『用語集』全体で出現した語の種類(異なり数)を問題にする場合を指す。

また、「故郷(こきょう)」は、『用語集』全体では、5回出現する。そのうち、見出し語として出現するのは〈26. 地理・場所〉だけで、他の4か所では例文の中の用語として出現している。このような場合、見出し語としては1回と数え、出現語数としては5回と数える。これを総語数と称することにする。ただし、例文にしばしば出現する語は、すべてを索引に示していないので、総語数はいわゆる延べ語数ではない。

以上の考え方で、『用語集』に出現した「見出し語」と「慣用句・ことわざ」を整理すると、下記ようになる。

	異なり数	総語数
見出し語	6,546	13,564
慣用句・ことわざ	417	441

すなわち、「見出し語」と「慣用句・ことわざ」を合わせると、七千語近くの単語がこの『用語集』では、提出されていることになる。また、例文中にのみ出現する単語の異なり数は約1,500なので、この『用語集』には慣用句を含め約8,500語が取められていることになる。語数の上からだけ言えば、上級学習者用の教科書としては、十分な量に達していると

見られる。

以下では、上の「見出し語」を対象とし、その内容について分析を行う。「慣用句・ことわざ」は、差し当たり、除くことにする。見出し語の中にも、慣用句に相当するものが含まれるが、それを語構成の面から問題にする場合は「連語」として扱う。

各分野(課)別の出現語数は、次のようになっている。

	見出し語数(総語数)		見出し語数(総語数)
1. 食物	386(501)	16. 法律	146(342)
2. 衣服	171(329)	17. 趣味	189(424)
3. 住居	146(265)	18. 芸術	195(319)
4. 道具	215(373)	19. スポーツ	145(266)
5. 施設・機関	153(215)	20. 人体	180(638)
6. 交通	163(322)	21. 生理	256(594)
7. 通信・報道	83(219)	22. 動物	130(250)
8. 人物	565(752)	23. 植物	131(221)
9. 親族	107(169)	24. 物質	155(380)
10. 行事	158(198)	25. 天体・気象	129(295)
11. 教育	240(386)	26. 地理・場所	310(686)
12. 職業・仕事	210(342)	27. 時間	368(803)
13. 生産・産業	169(342)	28. 数量・図形・色彩	356(760)
14. 経済	479(762)	29. 心理・感情	403(911)
15. 政治	232(356)	30. 思考・言語	538(1144)

これらの分野は、学習者の興味を引きやすく、単語の意味的な集合として意識するのに無理のないトピックを選定して決めたものである。それとともに、実際の授業でなるべく1課の学習に要する時間を一定にしたいという要求もあった。しかし、その両方を満たすのは難しく、語数にかなりのばらつきがある。そのことについては、「5. 意味分野の検討」で改めてふれることにする。

3. 見出し語の属性による分析

3.1 品詞別構成比

この『用語集』に出現した見出し語を品詞別に示したのが、表1である。ここでいう品詞は、いわゆる学校文法の品詞を指す。代名詞は、名詞とは区別した。造語成分には、狭義の接辞が含まれる。連語は、慣用句を含め、2語以上の結合体である。

合計数が先に示した見出し語の異なり数である6,546語と一致しないのは、例えば、上では1語とした「自然」をここでは名詞と形容動詞の双方に、あるいは「あいにく」を形容動詞と副詞とに重複して数えたためである。また、「研究」「成功」のようなサ変動詞の語幹は、名詞と動詞との両方に含めてある。

全体では、名詞の比率が圧倒的に高い。この種の意味分類体の語彙教科書では、どうしても名詞中心の分類になりがちである。しかし、この教科書では、できるかぎり名詞と関係の深い動詞や形容詞を探り上げることに努めた。その結果は、表1の比率にも表れている。一般の国語辞典の見出し語の比率は、次ページに示す通りであるが、それと比べれば、この『用

表 1 見出し語の品詞別構成比

	異なり数(百分比)
名 詞	5,538(74.9)
代 名 詞	16(0.2)
副 詞	69(0.9)
連 体 詞	3(0.1)
動 詞	1,135(15.4)
形 容 詞	170(2.3)
形容動詞	181(2.4)
造語成分	242(3.3)
連 語	35(0.5)
計	7,389(100.0)

語集』の特徴はよくうかがわれると見られる(数字は百分比)。

名詞—82.8 動詞—9.3 形容詞—1.1 形容動詞—2.0 副詞—2.4
(『新選国語辞典(第7版, 1994)』による)

例えば、この教科書では、〈22. 動物〉の[7. 動物の動作]で、「歩く」「走る」「駆ける」「跳ぶ」「跳ねる」「飛ぶ」「泳ぐ」「はう」の8語を見出し語として掲げ、「つばめ/とんぼが飛ぶ。」のような例文を添えた。これにより、動物名と移動動詞の関係が自然に理解されることを意図したわけである。あるいは、「決める」のような抽象的な意味の動詞は、〈16. 法律〉の[1. 規則]で、「規則」「ルール」「決まり」などの名詞と関連して学習させることにした。あわせて、「決める」の例文には、「…を決める」という形で、「方針」「計画」「態度」などの抽象的な意味の名詞と共起することに注意を促した。これらの名詞は、上級学習者には習得が必至の単語であるが、トピック別の構成では提出しにくいものである。

この教科書のもう一つの特徴は、造語成分を積極的に採り上げたことである。上記の国語辞典では、造語成分・接頭語・接尾語を合わせた語数は、869語(1.1%)であるが、この『用語集』では、比率の上でそれを上回っている。造語成分は、次のような形で提出されている。

- 〈一的〉 女性的—男性的 積極的—消極的 活動的 開放的
(〈8. 人物〉の[6. 態度・性格])
- 〈一製〉 作製 複製 精製 既製 特製 木製 外国製
(〈13. 生産・製造〉の[3. 工業・鉱業])
- 〈一傷〉 かすり傷 擦り傷 切り傷 生傷 古傷
(〈21. 生理〉の[6. 病気・治療])
- 〈木一〉 木立 木の葉 木の実
(〈23. 植物〉の[4. 木・樹木])
- 〈半一〉 半年 半月 半日 半世紀
(〈27. 時間〉の[2. 年・月・週・日])

これらは、狭義の造語成分(語基)にとどまらず、接辞や単語を含むものである。このような造語力の強い単位を採り上げることにより、ただ単語

を覚えるのではなく、それを含む一群の語を理解する手掛かりを与えることが可能になるはずである。ただし、純接辞的な「無一」「一化」「一さ」などは、この『用語集』では見出し語とすることができなかった。

連語はきわめてわずかだが、上の集計では、「もう少し」「若い者」のようなものに限っている。また、「慣用句・ことわざ」に掲げたものは、集計から省いてある。例えば、「あつという間」「間がもたない」は「慣用句・ことわざ索引」にある。ただし、「間を置いてから話します。」という例文中の「間を置く」は索引を作る際に、「間」「置く」として処理したので、連語にも慣用句にも含まれない。この種の慣用句に近い連語を含めれば、この教科書の連語はもっと多数に上るはずである。

「代名詞」「連体詞」「副詞」は、少数である。また、いわゆる十品詞の内の「接統詞」「感動詞」「助動詞」「助詞」は、表1にはない。これらは、この『用語集』のようなトピックによる分類体の本では、見出し語に立ちにくいものである。これらの内の主なものは、すでに初級段階で提出されていると見られる。また、中・上級に相当するものは、別途の方法で提示することが効果的であると考えられる。

3.2 語種別構成比

次に、この『用語集』の見出し語の語種構成について検討する。語種とは、単語の出自による区別である。漢語には、中国から流入したもののほか、それにならって作られた日本製の音読語も含まれる。混種語は、「荷物」「消しゴム」など、2種以上の異なる語種からなる合成語である。表1で「連語」としたものは、表2では除かれている。

見出し語の語種別構成比は、次ページの表2の通りである。漢語が半数以上を占め、和語がそれに次ぐ。この両者で85パーセント以上が占められ、外来語、混種語の比率は小さい。

これを、各種の文章の語種構成比と比べてみると、次ページの表3のようになる。数字は、異なり語数の百分比で示した。合計が100パーセントにならないものは、その調査の集計法によるためである。文章のジャ

表 2 見出し語の語種別構成比

	異なり数(百分比)
和 語	2,008(30.8)
漢 語	3,632(55.8)
外 来 語	552(8.5)
混 種 語	319(4.9)
計	6,511(100.0)

ンルの下に添えられた数字は、調査対象になった文章の発行年次(西暦)である。ジャンルは、漢語の構成比の多い順に、左から右へ並べてある。

これらは、調査の年次も、調査単位もそれぞれに異なり、簡単な比較は難しいが、おおむね、話しことばよりも書きことばのほうが漢語の比率が高いことがわかる。また、若年層よりも高年層のほうが漢語を多く使うことが、一般人よりも知的職業に従事する人のほうが、漢語や外来語を多く使いそうなことが読み取れる。国語辞典は、それらを総合した存在として、もっとも漢語の比率が高いことを特徴としている。

この結果を表2の『用語集』の構成比と比べると、興味深い事実が導き出される。まず、この教科書の漢語の構成比は、これらのどの調査より

表 3 各種文章の語種構成比

	国語辞典 (1969)	雑 誌 (1956)	知識人の会話 (1979)	児童読物 (1978)	テレビ (1989)
和 語	37.1	36.7	46.9	64.0	61.3
漢 語	52.9	47.5	40.0	29.7	21.5
外 来 語	7.8	9.8	10.1	4.0	3.5
混 種 語	2.2	6.0	3.0	2.3	10.0

上の引用の典拠となった文献略称(詳細は稿末文献一覧参照)

- 国語辞典——さねとう (1973) 雑誌——国立国語研 (1964)
 知識人の会話——野元 (1980) 児童読物——野村・柳瀬 (1979)
 テレビ——国立国語研 (1995)

も高く、国語辞典よりも大きな値を示している。これは、編者が語彙を選定する際に、上級学習者を念頭に置いていたことを意味する。普通の会話にはほとんど不自由がなく、読解力、文章表現力をつけることを望む学習者にとって、その基礎となる語彙力の充実は、漢語を主体とする書きことばの語彙の習得にほかならない。そのような要求を、私たちが意識的にあるいは無意識的に受け入れた結果がこの数値に示されていると見られる。

そのことは、『用語集』の語種構成比が、同じ話しことばの調査でも、テレビのことばよりも、知識人の会話に近い値を示していることとも関係する。この知識人とは日本語教育関係者や言語研究者で、学習者が接する指導者層の言語を反映している。日本語の授業であると否とにかかわらず、大学の構内で学習者が耳にする日本語の実態は、一般人のそれとは異なるものであることを、表3の数字は物語る。例えば、外来語の割合は、テレビのそれに比べ、知識人の会話では高い。『用語集』の外来語の比率が高いのは、日本語学習者が悩みとする外来語の習得に手掛かりを与えるものである。

ただし、上の結果を反省的に眺めるならば、漢語の比率がこれほど高くてよいのかという疑問がある。次項(3.3)で分析するように、漢語のほとんどはいわゆる二字漢語であり、この中には上級学習者にも程度が高すぎるものがないとはいえない。そのことには試用版の段階で気づき、かなりの単語を本版では削除したのであるが、なお検討の余地があることを上の数字は物語っている。

3.3 語構成単位別構成比

次に、「見出し語」を語構成単位から見た場合の分析を行う。見出し語を「単純語」「複合語」「派生語」に分け、それぞれを語種別に示したのが次ページの表4である。表1で「造語成分」「連語」としたものは、表4では除いてある。漢語の中には、「積極的」「不景気」のように接辞を構成要素とする派生語も含まれるが、字音形態素を語基と接辞に区別するのはここでは意味がないと思われるため、すべて複合語として集計してある。

表 4 見出し語の語構成単位別構成比

	和 語	漢 語	外 来 語	混 種 語	計
単 純 語	1,157 (58.6)	124 (3.6)	477 (88.5)	— —	1,758 (28.0)
複 合 語	718 (36.4)	3,329 (96.4)	62 (11.5)	277 (87.4)	4,386 (69.8)
派 生 語	98 (5.0)	— —	— —	40 (12.6)	138 (2.2)
計	1,973 (100.0)	3,453 (100.0)	539 (100.0)	317 (100.0)	6,282 (100.0)

見出し語が単純語で提出されるか合成語(複合語・派生語)で提出されるかは、語種によってかなりの違いがある。和語は、半数以上が単純語であるが、合成語も 40 パーセント強を占める。それに対して、漢語は大部分が合成語(複合語)である。「愛」「鉄」「門」などの単純語は、5 パーセントにも満たない。それと対照的に、外来語は 90 パーセント近くが単純語である。合成語には「テニスコート」「ホームドラマ」のような単語が含まれるが、数は多くない。混種語は複合語として採り上げられるものが多いが、「愛する」「感じる」「ふまじめ」のような派生語も少数含まれる。

全体としては、複合語が 70 パーセント弱を占めている。その内訳を示したのが次ページの表 5 である。「…単位語」のように示したのは、形態素(単語を構成する、意味を有する最小単位)の数による区分である。

漢語は、全体の約 4 分の 3 を占めるが、その更に 4 分の 3 強を 2 単位語が占めている。2 単位語とはすなわち二字漢語のことであるから、全見出し語の約 58 パーセントを二字漢語が占めていることになる。先に、語種別構成比の分析で漢語の割合が大きいことを指摘したが、それを語構成の面から説明すれば、2 字漢語が占める比率が高いということになる。そのことのよしあしは別として、中級以上の学習者にとって、漢語特に二字漢語の習得が量的にも問題となることを意味するものと言えよう。

3 単位語は、やはり漢語が多い。「小学校」「自動車」「地下鉄」などの

表 5 複合語の内訳

	和 語	漢 語	外 来 語	混 種 語	計
2 単 位 語	692 (96.4)	2,558 (76.8)	61 (98.4)	148 (53.4)	3,459 (78.9)
3 単 位 語	26 (3.6)	586 (17.6)	1 (1.6)	105 (37.9)	718 (16.3)
4 単 位 語	— —	152 (4.6)	— —	19 (6.9)	171 (3.9)
5 単 位 以上の語	— —	33 (1.0)	— —	5 (1.8)	38 (0.9)
計	718 (100.0)	3,329 (100.0)	62 (100.0)	277 (100.0)	4,386 (100.0)

基本語が含まれるためである。3 単位語では、混種語もやや多くなっている。これは、「誕生日」「運動靴」「研究センター」など、二字漢語を含むものが多いためである。4 単位以上の語では、漢語の割合が一層高くなる。「健康保険」「専門科目」「情報化社会」「政治経済学部」などの語は、学習者にとってやはり基本語に近いところに位置するものだろう。

4. 基本語彙との対照

以上の単語の属性に関する分析とは別の観点から、次に『用語集』と日本語学習のための基本語彙との共通度について眺めることにする。ここで比較の対象とする基本語彙として採り上げるのは、国立国語研究所日本語教育センターが『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)で選定した「基本語二千」「基本語六千」と称されるものである。この「基本語」で示されている語は、「専門科目」を「専門」と「科目」に分けるような、いわゆる短い単位である。したがって、それらの短い単位を組み合わせで形成される複合語は非常に少なくなっている。これに対して『用語集』は「意地悪」「遊び相手」「甘酸っぱい」「言い聞かせる」「医療費」「援助物資」「悪戦苦闘」など、積極的に複合語(合成語)を収録している。そのため『用語集』と「基本語」とに共通する語を調べると、その割合は次ページ

表 6 語種別に見た『用語集』の語彙の「基本語」との共通度

	基本語二千と共通	基本語六千と共通
和 語	596(46.1)	1,147(36.7)
漢 語	485(56.3)	1,472(45.6)
外 来 語	37(72.5)	168(53.8)
混 種 語	26(59.1)	87(39.4)
計	1,143(50.8)	2,874(41.8)

の表 6 に示すようにあまり高くはない。共通する語数は「基本語二千」で約 50 パーセント、「基本語六千」では 40 パーセント余りである。

共通度が低いもう一つの理由は、『用語集』が学習対象者を中級・上級者としていることによる。そのために、初級段階で既に学習したと思われるごく基本的な語彙は、積極的に収録されていない。さらに、「2. 語彙量の概観と用語の定義」で述べたように、『用語集』が意味分野別の用語集で、分野によって収録語数に偏りがあることも共通度が低くなっている理由と考えられる。上級学習者を意識した分野では、かなりの語数のやや専門的な単語が収録されているからである。

表 6 では、和語と漢語が大部分を占め、和語よりも漢語のほうが大きな比率を占めている。そのことの意味するものを確かめるために、『用語集』と「基本語二千」および「基本語六千」との語種構成比を比較してみる。それぞれの語種別語数とその比率を示したのが表 7 である。

「基本語二千」「基本語六千」と比較して、『用語集』の特徴として挙げられるのは、和語の比率が低く、漢語の比率がかなり高いことである。一般に、基本的な語彙には和語が多いと考えられる。それを裏書きするように、「基本語二千」では和語の比率が高く、漢語を上回っている。それと比べると、「基本語六千」では和語と漢語の比率はほぼ等しく、わずかながら漢語の占める割合が大きくなっている。『用語集』においてはその傾向がさらに顕著で、漢語の比率が和語を約 25 パーセント上回る。それと

表 7 『用語集』と『基本語』の語種構成比の比較

	用語集	基本語二千	基本語六千
和語	2,029(31.0)	1,293(57.5)	3,122(45.4)
漢語	3,632(55.5)	861(38.3)	3,225(46.9)
外来語	552(8.4)	51(2.3)	312(4.5)
混種語	333(5.1)	44(1.9)	221(3.2)
計	6,546(100.0)	2,249(100.0)	6,880(100.0)

ともに、外来語や混種語の比率も高くなっている。

このことは、いわゆる基本語彙と教科書との間には、収録される語彙の内容に違いがあることを推測させる。山下喜代(1993)は、3種類の日本語教科書を取り上げ、各教科書における語種別出現語数と比率を調査している。表8にその結果を示す。

この日本語教科書の調査は、学習対象者の異なる教科書を取り上げ、語彙について語種別の出現状況の特徴を明らかにしたものである。これらの教科書と『基本語六千』を比較すると、すべての教科書で和語の比率が小さく、外来語と混種語の比率が大きくなっている。特に、技術研修生やビ

表 8 日本語教科書の語種構成比

	教科書 A	教科書 B	教科書 C
和語	1,340(40.9)	1,279(36.6)	845(43.2)
漢語	1,504(45.9)	1,703(48.7)	807(41.3)
外来語	243(7.5)	358(10.3)	175(8.9)
混種語	187(5.7)	154(4.4)	129(6.6)
計	3,274(100.0)	3,494(100.0)	1,956(100.0)

調査対象となった教科書(詳しくは稿末を参照)

A—名古屋大学日本語教育グループ編『A Course in Modern Japanese Vol. 1~4』

B—国際協力事業団編『技術研修のための日本語 1~6』

C—日米会話学院日本語研修所編『日本語でビジネス会話 初級編・中級編』

ジネスマンを対象とした教科書は外来語の比率が高くなっており、『用語集』の外来語の比率はこれらの数値と近いものになっている。

漢語の割合では、これらの教科書は「基本語六千」のその上下の値を示している。しかし、いずれも『用語集』の割合よりは小さい。したがって、『用語集』の収録語彙が漢語に重点を置いていることは、基本語彙だけでなく、一般の教科書よりも特徴的であることが指摘される。

5. 意味分野の再検討

「2. 語彙量の概観と用語の定義」で述べたように、『用語集』における分野別の語数にはかなりのばらつきがある。また、見出し語の語種別構成比においては漢語の比率が特に高い。これは、中・上級学習者にとって必要と思われる語彙の収録を目指したことによるが、『用語集』の語彙の意味分布と語種分布が、実際にどのようになっているのかを検討する必要がある。ここでは、『分類語彙表』を基にして、『用語集』の意味分野を再検討することにする。

作業手順としては、中野洋(1996)のFD版を利用して、意味コードを付与し分析した。中野の『分類語彙表』は、元版の『分類語彙表』(国立国語研究所, 1964)を増補した約85,000の語彙を収録したものである。複合語や一部の慣用句も含まれており、多義語は複数の意味項目に配置されている。

『用語集』の語彙に意味コードを与えるに当たり、多義語の意味はその語が『用語集』の見出し語として掲げられた分野での意味に限定してコードを付与するものとした。また、『用語集』において複数の分野に出現する語については、一つの意味コードで代表させた。同様に「はかる(測る・量る・計る)」などの和語の語源を同じくする同音類義語も区別せずに一つの意味コードで代表させた。『用語集』の見出し語の内、『分類語彙表』に収録されていない語についてはコード付けを行わなかった。さらに、「体の類・用の類・相の類・その他の類」などの品詞性による分類は、

『分類語彙表』のそれに従ったので、「3. 見出し語の属性による分析」で示した品詞別構成比と異なるところがある。

以上のような方法でコード付けを行った結果、『用語集』に収録する見出し語 6,546 語の内、6,083 語に意味コードが付与された。すなわち、『用語集』の見出し語の内、463 語が『分類語彙表』未収録の語であった。この 463 語には、以下のようなものが目立つ。

[複合語] 一戸建て 着慣れる コピー機 カルチャースクール
[複次結合の漢語] 学園祭 記念写真 就職試験 文学研究所
[接辞性の字音語基を含む複合語] 今年中 ガス代 数か月
[派生語] 妹さん 先生方 子どもっぽい 親しみやすい
[略語] 芸大 工大 通販 各停 部活 短大生 政経学部
[字音造語成分] 一犬 一店 一器 一業 一営 一画
[音韻変化を伴う和語の造語成分] 一ごろ 一どき 一づよい
[連語] …分の… 海の日 痛い所

これらは、『分類語彙表』の元版で収録されていないのはもちろん、その増補版にも採録されていないわけである。それは、決して『分類語彙表』およびその増補版が不備であることを意味しない。その元版の主たる資料になったのは、用語調査の短い単位に基づく語彙表であった。したがって、複合語や派生語は採り上げられにくかった。また、増補版で資料とした各種の辞典などでも、これらの語は載せられにくい結合形である。しかし、日本語を学習する外国人学生にとっては、日常生活で不可欠なのが大部分を占めている。つまり、これらの『分類語彙表』未収録の語彙は、『用語集』における語彙選定の姿勢を反映したものと言えよう。

以下では、『分類語彙表』に収録されている 6,083 語について、その意味区分別の語数分布を検討する。次ページの表 9 は、『分類語彙表』の意味区分に基づき、『用語集』の語彙の意味分布を語種別に示したものである。

大別すると、意味分布は「体の類」5,240 語(86.1%)、「用の類」394 語(6.5%)、「相の類」442 語(7.3%)、「その他」7 語(0.1%)となってい

表9 『用語集』の見出し語の意味区分別語数と語種の関係

	和 語	漢 語	外来語	混種語	計
1. 体 の 類	1,317 (21.7)	3,184 (52.4)	518 (8.5)	221 (3.6)	5,240 (86.1)
1.1 抽象的關係	204 (3.4)	523 (8.6)	25 (0.4)	37 (0.6)	789 (13.0)
1.2 人間活動の主体	165 (2.7)	560 (9.2)	61 (1.0)	37 (0.6)	823 (13.5)
1.3 人間活動	327 (5.4)	1,382 (22.7)	125 (2.1)	70 (1.2)	1,904 (31.3)
1.4 生産物・用具	229 (3.8)	339 (5.6)	256 (4.2)	58 (1.0)	882 (14.5)
1.5 自然物・自然現象	392 (6.4)	380 (6.2)	51 (0.8)	19 (0.3)	842 (13.8)
2. 用 の 類	378 (6.2)	—	—	16 (0.3)	394 (6.5)
2.1 抽象的關係	28 (0.5)	—	—	2 (0.1)	30 (0.5)
2.3 精神・行為	302 (5.0)	—	—	12 (0.2)	314 (5.2)
2.5 自然現象	48 (0.8)	—	—	2 (0.1)	50 (0.8)
3. 相 の 類	274 (4.5)	137 (2.3)	3 (0.1)	28 (0.5)	442 (7.3)
3.1 抽象的關係	63 (1.0)	37 (0.6)	—	3 (0.1)	28 (0.5)
3.3 精神・行為	143 (2.4)	86 (1.4)	2 (0.1)	25 (0.4)	256 (4.1)
3.5 自然現象	68 (1.1)	14 (0.2)	1 (0.1)	—	83 (1.4)
4. そ の 他	1 (0.1)	5 (0.1)	—	1 (0.1)	7 (0.1)
4.1 接続詞類	1 (0.1)	—	—	—	1 (0.1)
4.3 陳述副詞・感動詞	—	5 (0.1)	—	1 (0.1)	6 (0.1)
計	1,970 (32.4)	3,326 (54.7)	521 (8.5)	266 (4.4)	6,083 (100.0)

る。先に示した見出し語の品詞別構成比(表1)に比べ、「用の類」(動詞)が減少して「体の類」(名詞)がかなり多くなっている。これは、サ変動詞の語幹を「体の類」のみに分類したことによる。

これを語種別に見ると、先に示した『用語集』の見出し語全体の語種構成比(表2)に比べ、和語がやや多く、漢語がやや少ない。つまり、『分類語彙表』に掲げられていない見出し語には、漢語が多いことを、この数字は物語っていることになる。しかし、漢語が半数以上を占めることにはかわりはない。

漢語が多数を占めるのは「体の類」で、特に《1.3 人間活動》では、全体の約3分の2を占めている。《1.1 抽象的關係》《1.2 人間活動の主体》でも、漢語の割合が大きい。和語が漢語を上回るのは、「用の類」と「相の類」であるが、これは「用の類」には漢語が有りえないことと、「相の類」では形容動詞の語幹に相当するものにしか漢語が有りえないことによる。つまり、品詞性に基づく偏りに原因がある。

「体の類」の中で、和語が漢語をしのぐのは、わずかに《1.5 自然物・自然現象》だけである。この分野では、地形名、身体部位などの基本語に和語が多いためである。外来語は、《1.4 生産物・用具》でのみ和語を上回り、漢語に次ぐ語数を占めている。

次に、『用語集』の意味分野と語種別の語数を「基本語六千」と比較してみる。国語研(1984)によると「基本語六千」の意味と語種は次ページの表10に示すとおりである。

「基本語六千」では表に示すように、「体の類」4,526語(65.8%)、「用の類」1,174語(17.1%)、「相の類」1,021語(14.8%)、「その他」159語(2.3%)である。『用語集』の語彙は、「基本語六千」と比べても、「体の類」に偏っていると言えるが、これは「3.1 品詞別構成比」で述べたような、『用語集』の性格や語彙選定の方向性によるものと言えよう。「用の類」「相の類」に属するものは、『用語集』では、「基本語六千」の半数以下に過ぎない。「体の類」は『用語集』が5,240語(86.1%)、「基本語六

表 10 『用語集』と「基本語六千」との意味区分別語数の比較

	用語集	基本語六千
1. 体の類	5,240 (86.1)	4,526 (65.8)
1.1 抽象的關係	789 (13.0)	1,233 (17.9)
1.2 人間活動の主体	823 (13.5)	574 (8.3)
1.3 人間活動	1,904 (31.3)	1,505 (21.9)
1.4 生産物・用具	882 (14.5)	632 (9.2)
1.5 自然物・自然現象	842 (13.8)	582 (8.5)
2. 用の類	394 (6.5)	1,174 (17.1)
2.1 抽象的關係	30 (0.5)	568 (8.5)
2.3 精神・行為	314 (5.2)	506 (7.4)
2.5 自然現象	50 (0.8)	100 (1.4)
3. 相の類	442 (7.3)	1,021 (14.8)
3.1 抽象的關係	28 (0.5)	586 (8.5)
3.3 精神・行為	256 (4.1)	336 (4.9)
3.5 自然現象	83 (1.4)	99 (1.4)
4. その他	7 (0.1)	159 (2.3)
4.1 接続詞類	1 (0.1)	53 (0.8)
4.3 陳述副詞・感動詞	6 (0.1)	106 (1.5)
計	6,083(100.0)	6,880(100.0)

千」が4,526語(65.8%)で、語数、比率ともかなりの違いがあるが、それぞれが全体で最も大きな割合を占めていることに違いはない。

この「体の類」に属するものを、その意味区分ごとの比率の大きい順に並べると、次のようになっている。

用語集 1.3 > 1.4 > 1.5 > 1.2 > 1.1
 基本語六千 1.3 > 1.1 > 1.4 > 1.5 > 1.2

《1.3 人間活動》が最も多いのは同じであるが、その比率の差は大きい。『用語集』は31.3パーセント、「基本語六千」は21.9パーセントであ

る。この《1.3》には『用語集』の分野で語数の多い〈14. 経済〉〈29. 心理・感情〉〈30. 思考・言語〉などの語彙が多数含まれている。『用語集』では次に、《1.4 生産物・用具》が多くなっている。これらは、分野別に見ると、〈1. 食物〉〈2. 衣服〉〈3. 住居〉〈4. 道具〉〈5. 施設・機関〉〈6. 交通〉〈7. 通信・報道〉などに収録されている語彙が多数を占めている。また、《1.1 抽象的關係》に分類される語彙が『用語集』では少ないが、この分野で「時間」「空間」「量」に関する語彙以外で、『用語集』に収録されているものは極端に少ない。抽象的な意味を表す語彙を『用語集』に取り込むことは今後の課題と言える。

以上に述べたように、『用語集』における分野別語彙の収録の特色は、『分類語彙表』に基づく意味区分別分布の調査結果にも表れている。語彙が名詞に偏っていること、また漢語が多数を占めることなど、『用語集』の語彙の収録には特徴が認められる。これらが語彙習得を目的とする教科書に付随する特徴であるか、あるいは選定の偏りによるものであるかについては、さらに検討の余地がある。中・上級学習者が、専門用語の学習以前に必要な語彙の習得に役立つ教科書にしていくためには、これらの問題点を改善し、さらに検討・修正を重ねていく必要があるだろう。

(1997. 10)

【引用文献】

- 大石初太郎他(1994) 新選国語辞典—第7版—(小学館)
国際協力事業団(1984-86) 技術研修のための日本語1~6(日本国際協力センター)
国立国語研究所(1964) 分類語彙表(資料集6, 秀英出版)
国立国語研究所(1964) 現代雑誌九十種の用語用字—第3分冊—(報告25, 秀英出版)
国立国語研究所(1984) 日本語教育のための基本語彙調査(報告78, 秀英出版)
国立国語研究所(1995) テレビ放送の語彙調査I(報告112, 秀英出版)
さねとうけいしゅう(1973) 近代日中交渉史話(春秋社)
中野 洋(1996) 「分類語彙表」形式による語彙分類表—増補版—(第1・第2分冊, FD版, 文部省科学研究費成果報告書)
名古屋大学日本語研究グループ(1983-90) A Course in Modern Japanese Vol.

1~4 (名古屋大学出版会)

日米会話学院日本語研修所(1987-89) 日本語でビジネス会話 初級編・中級編

野村雅昭・柳瀬智子(1979) 児童読物の語彙構造(計量国語学, 12-2)

野元菊雄ほか(1980) 日本人の知識階層における話しことばの実態(文部省科学研究費成果報告書)

山下喜代(1993) 日本語教科書の語彙(日本語学, 12-8)